



No 940
10.

語深秘抄

秘藏抄上

和歌古語深秘抄 一

都留文科大学附属図書館所蔵

只園 樂木

志加文庫

松本

四時を往る來るよ身く草木ハ
枝葉承るら風ハ我れに吹くハ
道邊のふあは白くよしけ 夏處
花重りいさるよて 夏よ身く
ふか紅きりて 夏よ身く
やあは黄のいさるよ 秋
海はんちわく乃とる 冬
ふんちとる 冬

有
みく乃し繁りてありははら
しらのこ結張じしははらぬ
しはらむ事しんはらよおふ事
はらひのく結言よししはら道
はらむ事しんはらぬ事しんはら
く事しんはらぬ事しんはらぬ
し又つたはらむ事しんはらぬ
又しんはらぬ事しんはらぬ

歩篠として岡里の女
はらむ事しんはらぬ事しんはらぬ
あはらむ事しんはらぬ事しんはらぬ
歩所又まつりありしははらぬ
はらむ事しんはらぬ事しんはらぬ
はらむ事しんはらぬ事しんはらぬ
はらむ事しんはらぬ事しんはらぬ
はらむ事しんはらぬ事しんはらぬ
はらむ事しんはらぬ事しんはらぬ

はるかにうらなふはあはれ
人のまじりてはよきはらひら
あふらやまはしよもひら
事とにらぬつたは道なも
とまじりてはよきはらひら
のこまじりてはよきはらひら
是騎者乃うまはらひら
はるかにうらなふはあはれ

はるかにうらなふはあはれ
人のまじりてはよきはらひら
あふらやまはしよもひら
事とにらぬつたは道なも
とまじりてはよきはらひら
のこまじりてはよきはらひら
是騎者乃うまはらひら
はるかにうらなふはあはれ

おもれ傳授口決の事一なるは我れと
 うよせよと一ありはふせく一しては
 ぬとむゆ一其外の世よひありて
 公志あり人よるにゆきゆき一私哥り
 師近なり一物もれしは師一よるの
 ひとくよるよるよるよるよるよる
 一事一よるよるよるよるよるよる
 一しよるよるよるよるよるよるよる

一て人よまきよるよるよるよる
 一我れよる中よる我れよる秘よる
 一又よるありてありよるの事よる
 一よるよるよるよるよるよるよるよる
 一よるよるよるよるよるよるよるよる
 一らよるよるよるよるよるよるよる
 一乃道よるよるよるよるよるよる
 一おたよるよるよるよるよるよる必

ほういふふ... (Handwritten Japanese text in vertical columns, starting with 'ほういふふ')

惠藤一雄

和歌古語採秘抄

惣目録

- 詠経標式
- 喜撰和奇式
- 孫娘和奇式
- 石見女式
右四式
- 秘藏抄

或況小見四式
やふ今... (Notes below the list items)

躬恒述作

○新撰髓腦

公任卿化

○莫傳抄

後賴述化

○和奇肘要

後成口作

○後身羽院河口傳

○和奇式

定家口化

○正風神抄

同作

○和歌庭訓 每月抄書

同化

○同口傳

家隆口作

○近來風神抄

抄政良基公

○瑩玉集

鴨長明化

○數河上

弁入道述化

○八雲口傳

為家口作

○よゝ乃家

河仙厄化

○耕字口傳

堯孝法印作

○桂明抄

○八雲一云記

○ 和奇二言集

○ 同用巻

以上

秘藏抄上

古今打聞躬恒撰之

ほととぎすあはれはなほさきり
 鳴るまねゆく松をいぢわよ
 とれきりやよりりほやみより
 や戸もたれそと別をこゆし
 風かけの松はけしれをきり
 上木よりやまのむらみくさ
 さきとちれ木はけし風はむら
 ぎりきりきりきりきり
 子日すのびくふし海川乃さくら

秘藏抄上

ふせのたりにあしむるに

是の秋のむすぶるに

まゝにせぬ人く

あしむるに

あしむるに

あしむるに

あしむるに

あしむるに

あしむるに

あしむるに

あしむるに

一 まねがね糸
二 じりり内海乾
三 あり光色
四 次 舟舟
五 たまきりこ
六 ころもれと
七 けやりのほし

八 へささき
九 へささき
十 へささき
十一 へささき
十二 へささき
十三 へささき
十四 へささき
十五 へささき
十六 へささき
十七 へささき
十八 へささき
十九 へささき
二十 へささき

二十一 へささき
二十二 へささき
二十三 へささき
二十四 へささき
二十五 へささき
二十六 へささき
二十七 へささき
二十八 へささき
二十九 へささき
三十 へささき

三十二 けやりのほし

三十一 けやりのほし

三十 けやりのほし

二十九 けやりのほし

二十八 けやりのほし

二十七 けやりのほし

二十六 けやりのほし

二十五 けやりのほし

二十四 けやりのほし

二十三 けやりのほし

二十二 けやりのほし

三十三 けやりのほし

三十二 けやりのほし

三十一 けやりのほし

三十 けやりのほし

二十九 けやりのほし

二十八 けやりのほし

二十七 けやりのほし

二十六 けやりのほし

二十五 けやりのほし

二十四 けやりのほし

二十三 けやりのほし

三十四 けやりのほし

三十三 けやりのほし

三十二 けやりのほし

三十一 けやりのほし

三十 けやりのほし

二十九 けやりのほし

二十八 けやりのほし

二十七 けやりのほし

二十六 けやりのほし

二十五 けやりのほし

二十四 けやりのほし

十二月異名

短詩 旋頭行 詠諧行

まうをのいしりす

秋の雪にまををばじこれとすれ

まををれいしをををにらまを 貫之

わはつふまををのいしりす

あふれ那りしをわわあし

是未尾花とぬるまをのいしりす也尾花のわを付ま

ますまをのいしりすれいしりすまをのいしりす

ゆをのいしりす人あり

花のうらあしりすゆれいしりす

まをのいしりすまをのいしりす

わをのいしりす車とまをのいしりす

ゆをのいしりす人あり

我やのいしりすれいしりす

まをのいしりすまをのいしりす

まをのいしりすまをのいしりす

まをのいしりすまをのいしりす

まをのいしりすまをのいしりす

まをのいしりすまをのいしりす

此を云ふは李杜也由りりて及らざ
らざるなり

^五 志は高くても一かやふ海をこえられ
えし志は高くても一かやふ海をこえられ

えし志は高くても一かやふ海をこえられ
可くなくもさる也

^六 山人乃ち思ひまきぬうて出ん

紅ふたねゆふ月三海一舞一業平

山人と仙人也志し人まきな夜いまぬま
お一仙家より電い紅あり

ゆゑ先電あり一々々の巻れ面に
心はくしんもあつたさり々々

山人先電より一々々の巻れ面也人へ海
うたふは成る云候もありらるるなりと
云ふなり

あつたなりやらつたなりと
まらふなり世乃れぬのいさうすは

くは雷也日月日れ小松を引くは
あつたなりやらつたなり

九
人とりぬるや戸つけぬちやうたを

螢もとりや火いこも一筆の御忠

あれはふたの堂へもやたやま

十
とらやちりぬおしひるれもよる

こらけり稲葉をたぬもやも 備前國

をこや守と田乃の海も人もひるる物

河をくもこれむはまよしみあは田よ

猪の志くもむとよ

十一
おちまに小野のまふぬる

こらけりちりぬおしひるれもよる

八
おちまにぬるもよる煙と云也

十二
去山よりちりぬのふりたを

をゆくほりきたたをとうとこめ日

白玉作といふ殿と云

十三
志はのおちまにたれをを言ふとて

そぬき民を海をかりりてみそり 伊勢

こあられ道といふ本にたれをぬき所こころ

新と云

十四
おちまの志くもよるえあはる人の

うたつはけりむよるつりよる

ついでに海原也さめと浪とまわり
しほはこほむとみぞなり

^{十五} 藤原のついでに海原也さめと浪とまわり

こまわりてねて旅人やちの田院

ふいふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふ

^{十六} ちせむつれり浪のたふもい

しれちふふふふふふふふふふ酒井全

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ちせむつれり浪のたふもい

おれをりきかひらぬあふと屋孫

あつりておれをりきかひらぬあふと屋孫 元方

おの緒といふ余くあふりつひらぬあふと屋孫

ちせむつれり浪のたふもい

^{十七} ちせむつれり浪のたふもい

いふふふふふふふふふふ朝教

志原ほふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ

^{十八} 秋の田んぼふふふふふふふふふ

朝数

けふれまききくまめりしき
そかりとひりかつ戸くけくれまきく時乃ほ
なり

十九
はやあいのうれじい雲いりけく

まてのいんかき乃初吉ひまひ 小野篁

つらみの乃そくまれ胡くまくのたをさとい
郭公ひく

廿
いんかきあきまのうれあつむれ

越路乃かき海くうりかぬ 惟明

あきみのうれまれ朝乃そく

廿
まかき乃やあつむれをまハ八重くひを

龍田れやまのうれしりわく 上野茶雄

ふれまきりきれうくあかきとんきまき

つらみ

廿二
ゆきまのよあきそをれいあつむれ

庭もまきにありふまゆふ 貫之

ゆきまのい冬れ朝をきく 物く

廿三
雲りくわ戸のいよ指さそを

まきりそすの七夕けりい 人見

あまれよの指よまけよそまれまきしん橋

おし長らわかれのさよ橋と云く

行山乃一所廿四おきりたせのよきり

とれがまじり口の去筆二飛家持

おきりこい畠をりく相おとい黄葉三とて草
れるく去筆去れ初生く

おし長らよひりりかてぬいせりたに廿五

遠玉ほふせおぬねぬ 讀人不知

せりきこい下たこくせれといまぢり遠玉ほ
ことけらぬま道く

ま廿六つわいといおきんとあつ尾よ

さむく少をぬき君とおき人廿七

ま廿七かこい男と云く

ま廿七まきくぬく花よゆれあきになぬ

あけさの井くわあ廿八

ま廿八まきくぬくち廿八ら廿八まきくぬく廿八
ら廿八同男く

ま廿八まきくぬく廿八ら廿八まきくぬく廿八
ま廿八増くぬかよ廿九ま廿九

ま廿九まきくぬく廿九ら廿九まきくぬく廿九
ま廿九まきくぬく廿九ら廿九まきくぬく廿九

天つ下もつゝむ神のみうぢの辰

ゆけつうをりてはれおちま

みそとみ津夜くゆいさの夜さきくさるり

たのちりおほつるれ神乃由衣を言なり

ちのわてきゆぶりにけたつちの

ゆへりおちまゆ志ぬーちの神 国書集

たのちりつるい命きいさるりつたつちを父

をまき志井志ぬのうてい父夜をまき

そちのまきまきいけいりまき

おのちりぬ志ぬーぬ神 深養父

ちのちりてつちまきる若のあはさる辰

いづたきしんち我ぬをらき奉

ちのちりていづちを辰乃うけりーちを

ちのちりていづちを辰乃うけりーちを

ちのちりていづちを辰乃うけりーちを

あーれ浦乃うけりーちの神人丸

右のちり海人乃釣よちのちりていづちを辰乃

をいづちを辰乃うけりていづちを辰乃

をいづちを辰乃

ちのちりていづちを辰乃

秋のつらさよふまゝのつらさ
去と秋のつらさよふまゝのつらさ
けりらめ反葉つらさよふまゝ

葉のねもあふまゝのつらさ
あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた
秋のつらさよふまゝのつらさ

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた
あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

あつたつたつたつたつたつた

う不鳥いまきれ雄多とまゝるれもふ
とわらしと鳴るとまゝく

あしちおのつゆかのふれまの麻八

ちうつゆまれのちよとまゝく

よのの身にまゝく夢やまゝく

あはれかまゝくまゝく

あしちおの將とゆ男くまゝれはまゝと

可とちまゝにあらまゝにまゝく夜の的

あしちおのちまゝにまゝくまゝく

あしち麻ありまゝく

ふよや今夜まゝく夢やまゝく

あしちまゝにまゝくまゝく

あしち鹿のまゝくまゝく

あしちまゝくまゝく

あしちまゝくまゝく

あしちまゝくまゝく

あしちまゝくまゝく

あしちまゝくまゝく

あしちまゝくまゝく

あしち鹿やまゝく

みづり

九初稿

十一

^{卅九}うらみゆきふらふらうる菊

去冬ささるれ冬あてうらさ 讀み

うらさきくは美ゆき兼てうら故に若兼如

門門黄ゆき河あじ竹ふらふら

兼和菊と云兼初の兼とまの志き二枝

を二枝とてうらふめくたさる

^{卅十}身乃うらふあふれ秋子わらぬ

ゆらきかほよらひもる鳴 讀み

ねさるれと神し新し徐宜すけり

十一

あはれは原ふをわら月うを酒井

天は乃ほらりよはあふと云可るれ

了せらるれと神をさ

^一朗詠部

清紅鮮好仙か之電愷毛

さちぬらぬ衣しあふ電れ

と川あつ物を梅乃あはれ

紅し白し梅れあふ香ともさる人

みぎぬかすおらうら仙人の業す

八初稿

雪の冬あけしやまなくうの春もけ梅の
つらとまけしとよまも也仙人のまはる
きりぬのまけしとよまも也仙人のまはる
ニエン 昭王招涼之珠當明月自得

きりぬのまけしとよまも也仙人のまはる
きりぬのまけしとよまも也仙人のまはる

燕昭王の玉のつらとまけしとよまも也
きりぬのまけしとよまも也仙人のまはる

三 鷓鴣 背 上 数 片 之 紅 終 殘

きりぬのまけしとよまも也仙人のまはる

ちりちりお鳥のけしとよまも也

鷓鴣とよまも也仙人のまはる
あけしとよまも也仙人のまはる
木紫いぢりまも也仙人のまはる

四 暖泉流處冬草青

あけしとよまも也仙人のまはる
あけしとよまも也仙人のまはる

あけしとよまも也仙人のまはる
あけしとよまも也仙人のまはる

五巻六昔ハナ為ト鴛ト与ト鴛ト今ト作ト新ト時ト齋ト

秘刊上

十三

おれいさやをこれかたはらちのり
かよふや并乃やちりきむと反
きり多いのちの中ひらりせぬれも年れ
やもけりひまわけてむむ多き冬と高とま
里ハ二つくはらち一おれ二き出ぬとま

六イ未イ及イ暮ホ景ホ燧ホ之ホ世ホ無ホ常ホ

つれよつねあつて一やおれよ
ゆふけきなるるをりよのせぬ

蜂ハチ蟻アリとト虫ムシハ知チじジちチわワくク夕タハ志シあアるル虫ムシちチり
たれし世のりつれよつねあつて

十二月異名

正月むつし

紀友則

いけふらちを〜
四月れはさるのうす〜
二月ま〜
三月や〜

敏行朝

これてけやよひれ〜

八重れらぬはなつらふもこゝろ

四月 卯月

源宗平

卯月とてゆくは花よこめさむく
つらふきぬくやうほくまひ

五月 さ月

元方

郭ふ五月の雨うらむをれて
まねくまひかよ投うはちぬく

六月 みか月

小野春風

これ月れけ思れもくさうけく
そとやまあさひの風こゝろさち

七月 ちか月

貞文

きれされはなは色いふたさりて
まきさうあふへきさ月きたつて

八月 ちつ月

保卷父

初とれはなまきぬちりまひふそ
卵のりれはなまきぬちりまひ

九月 ちか月

貞文

わらよあまのうちれく菊も
かうふくくはさちりちりれ

十月 秋月

意性

秋霜下れて後の木を志こも
うらむれ牡丹れ錦成るれ

十月 霜月

心付まに雪まのうらやありふり
そぬこ内なる露月の空

十一月 志りす

業平

おにやかく志たれ定に成ふり
あつれこあつるうのねうね

又秘苑各あり

正月 さみより月

貴之

やもわくさみり月ありあけの
可さるけし小松をくまら

二月 じめけさ月

友則

うらむきのうらぬ山のやとるけし
花さうらなれむ幾月さ月

三月 さもれさ月

同

たふ入馬をあたりにあられあり
さつかに月よりまやを思ゆけ

四月 六のさ月

家持

きりぬてきおふもとくふ野云

五月さくら月きあけぬる

小野篁

池つちあけまきこもゆー只れあやめりし
やたにのちーけさる月さる

樂膳

六月さくら月

木近院太子

ほとふれなごりさる月さる
いとまれ月さるあやめりし

七月さくら月

酒井人真

さくらさる月さるあやめりし
いとまれ月さるあやめりし

八月さくら月

藤原法師

まじくさる月さるあやめりし
あさる月さるあやめりし

九月さくら月

菅原定吉

さくらさる月さるあやめりし
いとまれ月さるあやめりし

十月さくら月

同

よさる月さるあやめりし
いとまれ月さるあやめりし

十一月さくら月

人丸

花梅こそわれを月乃き所なるれり
お月宮けふありつゝさきれ

十二月年よひの月

あれうらやうらひ月つゝさね

かさひくしふれまよりき想

是れあかうちた人うたれつゝ十二月れ其名
をこら実名をもちてつねの異名を反作あり
此異名をさうさうやうに名のつゝさね
末の世人もこれ可ぬいひさうさね

八短評之すさ

あふおやま	まのさうまに	おさひうま
我身ハ帝リ	あふ山雲乃	おゆ時あそ
うーれ縁乃	さつくとさふ	おさ人あま
逢ふゆかり	あふうそ	人あうさむ
まのりこれ	おさあさうそ	おさひう
あふ山雲乃	いさうさう	おさひう
梅くさのの	さゆ時あそ	うかあま
思ひみりわく	あふゆふれ	さふけあそ
おさ山雲乃	えよのさあれ	おさあま
おさ山雲乃	あふ山雲乃	山下水法

松竹

こころをれて	ふけさるるを	きれりかき
あひかきと心	父ふゆきを	人志らあけり
をみる免乃	夕うをれも	ふとわわく
船かくくを	あけさうり	せしきあきた
庭りゆく	さむやまへい	あけさ人志
了ゆもの袖ふ	あつたせれ	言ふいまあへ
おき人ゆも	あけさあけ	まゆうん
よふゆも人り	ありむとあへ	貫之

九 旋頭行

まろさみきれ山乃もみち紫衣

又神正月時ぬりもむせきり
 謝借奇れき
 +
 つくもこれ田所つれりうほまき
 ちくれんがさとあふれくう

松前村

こころをれて

ふけふをば

きりりかき

あひびきりて

父ふゆきき

人あひりり

をみり先乃

夕ふをれも

ふとりのゆき

物かしくせ

あけふのゆき

せしむるゆき

庭よりゆき

さむやきゆき

あけふのゆき

了ゆきの神ふ

なつてゆき

あけふのゆき

おろしゆき

あけふのゆき

あけふのゆき

よほゆき

ありむとゆき

あけふのゆき

九 旋頭行

まこころをみりゆき山乃あけふのゆき

又神正月時あけふのゆき
誦 借奇れき

+ けしむるゆき
あけふのゆき

Handwritten notes and a red stamp on a piece of paper attached to the bottom left of the page.

